

〈企画展「小吉 勝海舟を育んだ父」 プレイバック 番外編〉

天保く嘉永期の海舟（麟太郎）

星川 礼応

1 小吉の晩年を紐解く前に

前回（第5回）までは、『夢酔独言』から知られてきた天保14（1843）年までの勝小吉（夢酔）の42年にわたる生涯を、「小吉」展で初公開した新出資料と『夢酔独言』の記述内容とを交えながら振り返ってきた。これに対し、今後は、小吉が嘉永3（1850）年9月4日に死去するまでの知られざる約7年間の余生の様子について、同様に新出資料から明らかにしていく。

しかし、その前に一つ、整理しておかねばならないことがある。

今回発見された新資料は、いずれも嘉永期のものである。つまり、弘化年間を挟む天保14年く嘉永元年の間（小吉は42く47歳）の資料はこの中に含まれていないが、この間に勝家では、主に麟太郎の成長に伴う重要な出来事がいくつかあった。これらの事柄は、これから小吉の晩年を紐解いていく上で重要な前提となる。

そこで今回は少し寄り道をし、天保・弘化・嘉永期の勝家（主に麟太郎）の状況について確認しておくこととしたい。長年にわたり勝海舟研究を牽引してこられた松浦玲まつうら れい氏の成果<sup>(1)</sup>に学びながら、適宜その時々の小吉の状況についても付言しようと思う。

なお、その過程で引用する資料には、麟太郎と名乗っていた時期よりも後年（主に明治期）のものも含まれる。時制によって呼称が麟太郎と海舟の間を行ったり来たりするので、今回は便宜的に全ての表記を「海舟」に統一することを予め断っておく。

2 海舟と蘭学との関係

当該期の海舟について考える上で欠かせないのが、蘭学との関係である。

このことについて分かりやすくまとめられた文章を、これまでも度々引用してきた戸川残花の著書『海舟先生』から次に掲げよう<sup>(2)</sup>。

〔参考1〕『海舟先生』（抄出）

（海舟）先生は又武術の師たる島田虎之助氏に勧められて、和蘭の兵学を学ばんと思ひ、不図した事で、城中に在った和蘭から献上の大砲を見、其の砲身の横文字を讀まうと思ふ好奇心から、いよゝゝ蘭書を学ぶ必要を感じられたそうである。

先生は大砲を見て後、直ぐに当時の蘭学者箕作玄甫（マ、阮甫）の家を訪ねて、海外の事情を問ひ、その所蔵の萬國地圖を示されて、愈々蘭学研究の志を堅くし金百疋を包んだ束脩を持って、再び玄甫（マ）をたづね、入門を願ったところ、玄甫（マ）は頭を左右にふって『よしの方がよい、蘭学は性急な江戸人に学ばれるものではない、その上、拙者は多様で人に教へる時間がない』と言つて断つた。先生は憤然として辞し去り、更に永井青崖の門を叩き、始めて入学を許可された。青崖は筑前の藩士で、藩侯黒田氏は新刊の蘭書を多く蔵せられ、青崖は其翻譯を司つたものだから、先生は新書を閲覽する便を得、又藩侯からは特別の待遇を蒙むことが出来た、この頃の事か都甲斧太郎と云ふ蘭学者にも相談せしことありと云ふ。

要約すると、次のようなことが書かれている。

島田虎之助（号「見山」けんざん）の勧めによりオランダ兵学の習得を志した海舟は、ある日、江戸城中でオランダ製の砲を目撃する。その砲身に刻まれた横文字（欧文）に興味を抱いた海舟は、衝動的に美作国（現・岡山県）津山出身の蘭学者・箕作阮甫（天保10年、幕府の蕃書和解御用手伝を拝命）ばんしよわけしよつを訪問し、そこで初めて箕作所蔵の「万国地図」を目の当たりにした。これを契機に蘭学への志を篤くした海舟は、箕作に弟子入りを志願するが、「性急な江戸の人間に蘭学は無理」という理由で、あえなく断られてしまう。憤然として箕作のもとを退出した海舟がその後を訪問したのが、「蘭癖大名」として知られる筑前福岡藩主・黒田斉溥（のち長溥、実父は薩摩藩第8代藩主・島津重豪で、大甥が島津斉彬）なりひろ ながひろの下で蘭書翻訳を担当していた蘭学者・永井青崖の門であった。せいがい

・・・という内容である。若き海舟の「立志伝」の有名な一幕として、聞き知っている人も少なくないのではなからうか。

但し、戸川は飽くまで聞き書きとして書き綴っているため、各エピソードについて時期を一々明記していない。

これに対し、それらの時期を大まかながら示しているのが、富田鐵之助<sup>とみたてつのすけ</sup>である。仙台藩出身の富田は海舟の蘭学の弟子で、慶応3（1867）年、海舟の嫡男・小鹿<sup>こらく</sup>が渡米する際には高木三郎<sup>たかぎさぶろう</sup>（庄内藩士）と共に随行した経歴を有する。維新後、帰国してからは明治政府の官僚となり、明治15（1882）年に日本銀行の初代副総裁、同24〜26年には東京府知事を務めた。



富田 鐵之助  
『東京府史』府會篇 第一卷  
（東京府、1929年）口絵より  
（国立国会図書館デジタルコレク



高木 三郎  
（国立国会図書館  
「近代日本人の肖像」より）

そんな富田の著作に、明治38（1905）年4月刊行の『海舟年譜』がある。師・海舟の経歴を年表の形でまとめた本書には、海舟が13〜14歳から師事した島田虎之助（見山）の忠告で「西洋兵法ヲ學ハント志」したことや、「或時（筆者註、江戸）城中ニ於テ大砲ヲ一見」し、横文（欧文）を読めなかったことから「大砲ヲ使用スルノ道、愈蘭書ヲ學ブノ必要ヲ感」じたことなどが、天保9（1838）年の欄に記載されている<sup>(3)</sup>。海舟の蘭学開始を、海舟が16歳だったこの年に位置付けた根拠は明らかでないが、内容自体は戸川の聞き書きとの一致が認められる。

これに対して松浦氏は、『近世偉人数章』<sup>きんせいゑいじんすうしやう</sup>（4）という資料から、その経緯を明らかにしようとした。これは、老境にさしかかった明治期の海舟が書いた小記で、青年期に知遇を得た人々の追憶が記されている。尤も、老海舟の記憶に依拠している分、年紀と年齢との齟齬が所々に見受けられ、記述内容をそのまま信じるのが難しいという瑕疵<sup>かし</sup>がある。

明治期の海舟の著作には、このような性質のものが少なくない。この辺りの扱いは、小吉の『夢酔独言』のそれと同様に注意が必要である。

それはさておき。松浦氏は『近世偉人数章』に拠り、海舟が蘭学に着手するまでの経緯を次のように整理した【一】の中は、『近世偉人数章』内の該当箇所を示す。

①天保10（1839）年、13〜14歳の時（実際は17歳）、蛮社の獄を目撃。

【わたなべかざん  
渡辺崋山の項】

②天保12（1841）年（19歳）3月15日、初めて「万国地図」を目撃した

衝撃と、世界への志を述べる。 【末文、辛丑（天保12年）3月15日付】

③天保13（1842）年（20歳）秋頃、オランダ語の読習を開始。

④天保14（1843）年（21歳）初秋7月、基礎的なオランダ語の扱いが可能に。

【冒頭の永井青崖の項、癸卯（天保14年）初秋】

富田が海舟の蘭学開始時期とした16歳は、右に当てはめると①の直前ということになる。しかし松浦氏は、蘭学は海舟にとって重要な事柄であるにも関わらず、開始した年齢に関する記憶が実際より大きくズレていること、さらには、当時海舟が島田虎之助の下で「剣術修行の仕上げに励む時期」にあったことを挙げ、16歳は海舟の蘭学開始時期として「早過ぎる」と断じた。その上で、海舟が蘭学を始めたタイミングは、「万国地図」を目撃したとされる②以降、おそらく天保13年秋（当時20歳）に下るであろうことを推定している。

これに照らすと、オランダ製大砲と「万国地図」の目撃から青崖への入門までをあたかも一連の出来事かのように記している戸川・富田の所伝は、段階を踏んで発展していった実際の過程とは大分異なっていたことが窺われよう。

### 3 海舟の蘭学に小吉はどう関わり得たか

海舟が蘭学へと接近していった天保後期とえば、小吉の晩年期への入り口でもあった。父子の極めて密接な関係性に鑑みると、海舟の学業に影響を与え得た存在は決して蘭学者のみならず、小吉もまた、その一員たり得たことは間違いないであろう。

そこで本項では、『近世偉人数章』などから明らかにされた海舟の蘭学過程を、前回まで述べてきた小吉の状況を踏まえて捉え直し、小吉の海舟への影響の有無を検証したい。

まず注目するのは、海舟が「万国地図」を目撃②してから、オランダ語の読習を開始する③までの約1年半のスパンである。前回の第5回コラムでは、天保12年6月に海舟が、天保の改革の主導者である老中・水野忠邦政権から父・小吉（夢酔）の件でみずのただくに譴責けんせきされていた可能性が指摘され（資料8）参照）、その半年後に、勝家が一家もろとも旗本・保科家邸宅（虎ノ門新道）への御預けという罰に処されたことを述べた。まさにこれは、②から③の間に発生した事件として位置付けることが出来る。

また、海舟が「万国地図」を見たときとされる天保12年3月②は、海舟が幕府から譴責を受けたと考えられる時の約3ヶ月前に当たる⑤。海舟は、それ以前から度々幕府の注意を受けていたようなので、地図を見た時には既にそのような状況に置かれていたとしてもおかしくはない。さらに、戸川・富田の記述で、海舟が「万国地図」を見るくだりの前段に挿入されている「海舟が江戸城中でオランダ製大砲を見た」という話が若し本当であったとするならば、当時無役であった海舟が登城した用件が気になるところである。これについては、現時点で直接的な明証が得られていない以上飽くまで想像の域を出ないが、時期や状況に鑑みれば、例の譴責と関係する何らかの事情で召喚されたという状況も考えられないことではない。

いずれにせよ、天保の改革下のこうした状況が、海舟の蘭学開始に「待った」をかける要因たり得たことは明らかである。住み慣れた本所の地から切り離され、幕府の監視下で謹慎状態となつてからは、経済的にも蘭学を習う余裕など無かつたであろう。

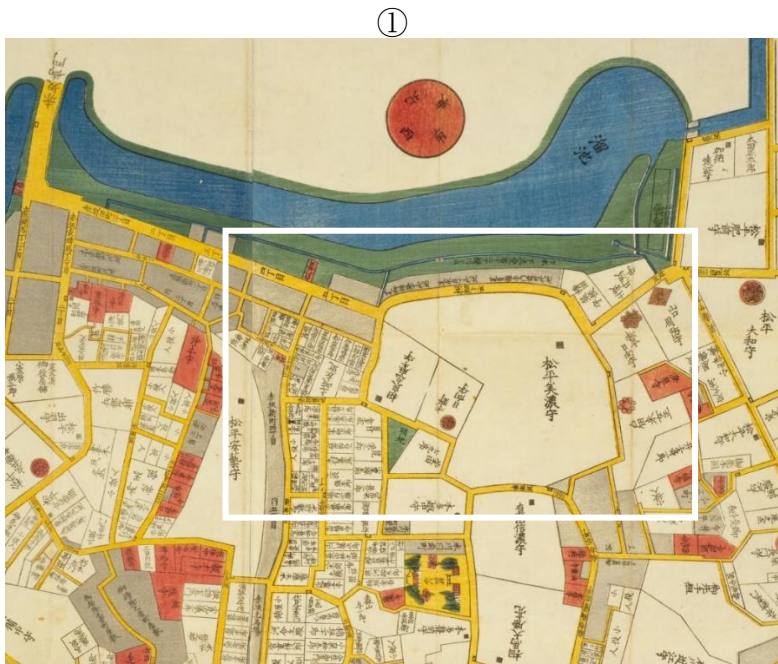
しかしその一方、処罰による環境の変化が、結果的に海舟と蘭学との距離を縮める要因となり得たことにも注目すべきである。ここで絵図を用いながら、当時勝家がどうい

境に身を置いていたのか確認しよう。

〔参考2〕「江戸切絵図 麴町永田町 外櫻田絵図」(6) (部分) ※②は①白枠内の拡大図



〔参考3〕「江戸切絵図 今井谷六本木 赤坂絵図」(7) (部分) ※②は①白枠内の拡大図



〔参考2〕は、勝家が預けられた虎ノ門の保科邸の所在を示す。白枳内を拡大すると「保科永次郎」（栄次郎）と書かれているのが分かる（赤枳内）。そして、この南側の地域を示す図が〔参考3〕である。資料名からも分かる通り、虎ノ門の南側一帯には溜池（現・溜池山王）を挟んで赤坂の町が広がっていた。

〔参考3〕の中央部分には、赤坂市街において一際大きな面積を占め「松平美濃守」と記名された領域が描かれている。ここは筑前福岡藩主・黒田斉溥（松平美濃守）の中屋敷（8）（現・港区赤坂2）である。そして、海舟の蘭学の師・永井青崖はここに居た（9）。

要するに、海舟が本所から虎ノ門へと移ったことは、海舟と青崖との地理的な距離を大きく縮め、両者が接触を持つ重要な前提となり得た”とも言い得るのである。

赤坂までの直線距離は、本所からだ約6〜7キロメートルの隔たりがあるが、虎ノ門からであれば約1キロ程度である。このことを考えると、海舟が青崖の知遇を得、その門に足繁く通い得たのは、少なくとも虎ノ門に移った天保12年12月以降、天保13年に入ってからのことではなかったかと推測される。また、このことは”天保13年秋にオランダ語の読習を開始した”とする『近世偉人数章』の記載とも矛盾しない。

さらに、海舟は後年、親交があつた蘭学者・大槻磐溪おおつきはんけいの次男・如電じょでんに宛てた書状で、

〈前略〉小拙其頃、筑前藩永井青崖と申す人に付、『ガラムチカ』杯読習、官よりは禁足を被命居、夜中内に他行位の事にて、実におかしき事に候、其折馬屋同心隠居都甲斧太郎と申老人、小関三英、高野長英に従ひ学候間、此老人のみは折々尋聞も候ひき、

と回顧したと伝わっている<sup>(10)</sup>。ここから、海舟が青崖から学んだのはオランダ語の「ガラムチカ」、すなわち文法 (Grammatica) であつたことが分かり、天保14年初秋には基礎的なオランダ語を習得したとする記述<sup>(4)</sup>と整合する。よつて本稿では、海舟の青崖への入門時期を天保13年秋頃（虎ノ門に謹慎して7〜8ヶ月後）と推定しておきたい。

因みに、海舟が大概如電宛の書状で記した「官よりは禁足を被命居」のくだりは、一見すると”小吉絶縁の不履行による虎ノ門保科家への御預け”自体を指しているようにも見

えるが、その直後に「夜中内に他行位の事にて、実におかしき事に候（夜中に外出した位で（禁足を命じるとは）実におかしい事だ）」と述べていることから、〃御預け後の行動（御預けの身であるにも関わらず、夜間に歩いたこと）に対する罰〃を示す文言と解する方が妥当であろう。なお「夜中内に他行」のくだりは、青崖に関する記憶の後に書かれていることから、ここから〃蘭学に熱中のあまり毎夜青崖の元に通った海舟の姿〃を読み取りたくなるが、この文言からそこまで汲み取ることは難しい。

いずれにせよ、当時海舟が厳しく行動が制限され、その中で蘭学への渴望を深めていったことは想像するに難くないだろう。かくして海舟の蘭学は、小吉も無関係ではなかった天保の改革による行動規制の影響を受け、停滞、そして進展していったと言うことが出来るのである。

### 3 おわりに く弘化年間の海舟と小吉く

天保14年閏9月13日、天保の改革を推し進めてきた老中・水野忠邦が改革の失敗により罷免される。この頃、小吉（夢酔）は隠居所「鶯谷庵」おうこくあんで『夢酔独言』や『平山龍先生遺事』（江戸四谷の兵学者・平山行蔵（子龍）との交流の記録）しりゅうを書き上げ、海舟（21歳）は永井青崖の下で初歩のオランダ語をマスターしつつ、都甲斧太郎つこうら蘭学方面の人脈を着々と広げつつあった。

忠邦失脚が直ちに彼らに影響を与えたか否か、その実態は文書の中にはなかなか顕れない。但し、それから2年後である弘化2（1845）年の秋、海舟が妻を迎えていることは、勝家の状況に変化があったことを示す指標の一つと捉えて良いだろう。妻は、以前に小吉が世話をした旗本・岡野融貞（孫一郎）とをさだの養女で、実は薪炭屋や質屋を営んだ砥目家とのめの息女・民たみであった。さらに、翌弘化3年春には赤坂田町に転居している。同年の9月15日には長女・夢が誕生しているから、家族が増えることに備える意味もあったろう。

これらの様子から、海舟の行動の自由がある程度回復されていたことが明らかである。おそらく、忠邦失脚と前後して海舟は赦され、謹慎を解かれていた可能性が高い。

とは言っても、勝家の貧困な状況は相変わらずだった。海舟の苦学譚の中でも有名な



『ドーフ・ハルマ』の筆写は、まさにこの頃の話である。

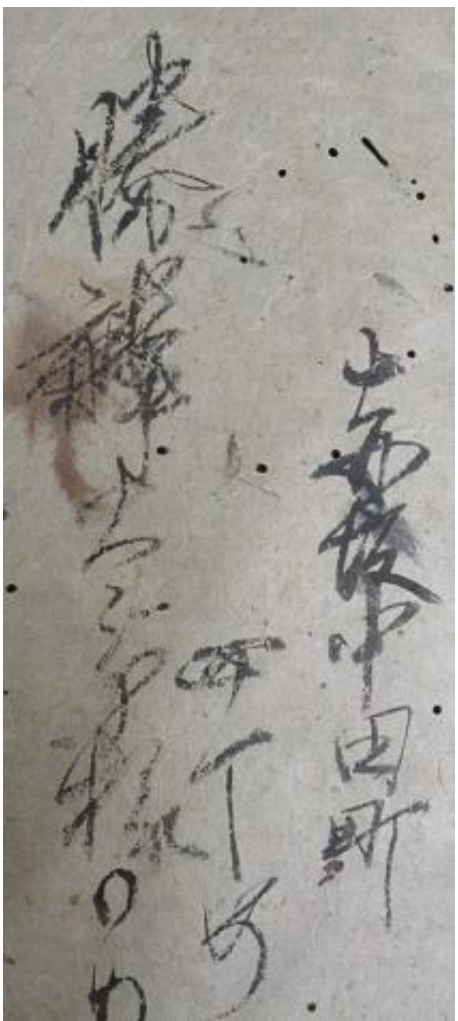
当時高価で入手困難だった日蘭辞書『ドーフ・ハルマ』を、海舟は蘭医・赤城某から1ヶ年10両で借り受ける。これが、田町に引っ越した翌年である弘化4（1847）年秋、海舟25歳の時のことであった。翌嘉永元年8月2日までに写本を2部作成した海舟は、うち1部を売却し、その金で借用料その他諸々の出費を相殺したのだった。

海舟が手許に遺した『ドーフ・ハルマ』写本には、海舟自筆の後書(1)がある。そこで海舟は「夏夜無蠅、冬夜無衾（夏の夜は蚊帳が無く、冬の夜は布団が無い）」、「大母病床に在り、諸妹幼弱不解事（母は病床にあり、妹や娘たちは状況について理解するには幼弱であった）」、「自ら椽を破り、柱を割て炊く（自分で縁側板を壊し、柱を割って煮炊きする）」と表現している。当時の勝一家の深刻な経済状況が窺われよう。

ここには、大母（信、小吉妻）や諸妹（実妹の順・花や、娘の夢）の状況が僅かに記されておられ、海舟が彼女らと同居していたことが明らかである。その一方で、父・小吉に関する言及が見られないことが気にかかる。

当時、小吉はどのような状況にあったのか。このことについて、資料の中から痕跡を探ってみるとしよう。

〔参考4〕 赤坂時代の海舟の住所（勝海舟記念館所蔵資料より）



右は、弘化く嘉永期のものと推定される資料（未公開）の末尾に遺された筆跡である。「赤坂中田町四丁目 勝麟太郎様」とあり、海舟の新住所が分かる(1)。

次に、「赤坂絵図」〔参考3〕の（ ）の中から、この住所に該当する箇所（①白枠内の左上部分）を見てみよう。そうすると、



赤坂田町四丁目の一面に「勝夢睡(マ、酔)」と記されている(13)ことが分かる。

当時、勝家の当主は紛れもなく海舟であった。それにも関わらず小吉の名が記された理由は定かでないが、切絵図の表記は（少なくとも切絵図の作成者の認識においては）当時小吉が勝家の代表者として通っていたことを示唆している。さらに、この切絵図は小吉の最晩年である嘉永3年の版であるから、この頃までに幕府は、海舟と同様に小吉の罪名をも除いていたのではなかったかと思われる。

本来であれば、これを以て「小吉が虎ノ門の保科栄次郎宅を出、田町四丁目の海舟の自宅へと移り住んだ」ことの徴証とし、貧乏ではあるが、孝行息子や家族に囲まれながら余生を送った姿を想像するところである。しかし……。

この続きは次回にまわしたい。いよいよ新出資料を手掛かりとして、最晩年の小吉がどのような生活を送っていたのか。その様子について明らかにしていくとしよう。（摺筆）

- 1 松浦玲『勝海舟』（筑摩書房、2010年）36～43頁
- 2 戸川残花「(五) 家督相続と蘭学研究」(六) 蘭学の師」(成功雜誌社、1910年、9～11頁)
- 3 富田鉄之助編『海舟年譜』(私家版、1905年) 5～6頁
- 4 勝海舟全集刊行会・江藤淳編『勝海舟全集2 書簡と建言』(講談社、1982年) 404～409頁
- 5 なお、この2ヶ月後(資料8)が出される前月)である天保12年5月9日には、長崎会所調役頭取の高島茂敦(四郎太夫、秋帆)が、武州西臺徳丸原(現・板橋区高島平)で初めて、オランダ式の砲術訓練を行っている。海舟がこれを直接目撃した明証は無いが、戸川残花は海舟が蘭学への志を強固にする契機の一つとして紹介する(註2戸川前掲書、13～14頁)。
- 6 景山致恭図・尾張屋清七版「翹町永田町 外櫻田絵図」嘉永3年(国立国会図書館デジタルコレクシヨン、請求番号本別9・30 より)
- 7 景山致恭図・尾張屋清七版「今井谷六本木 赤坂絵図」嘉永3年(註6に同じ)
- 8 維新史料編纂事務局編『維新史料綱要』2巻(目黒書店、1937年)574頁に、「福岡藩主黒田斉溥、赤坂溜池中屋敷ニ於テ訓練ヲ行フノ許可ヲ請フ、幕府之ヲ聴ス」(「福岡藩江戸御用状」との記載あり)。
- 9 尾崎秀樹「勝海舟とその時代」(尾崎秀樹・小沢健志『写真秘録 勝海舟』、講談社、1974年)132頁。なお、青崖が福岡藩中屋敷に居たことは、後日紹介する資料からも裏付けることが出来るので、改めて触れる。
- 10 徳富蘇峰『偉人傳全集 第七巻』勝海舟傳』(改造社、1932年)52～53頁
- 11 勝海舟全集刊行会・江藤淳編『勝海舟全集22 秘録と随想』(講談社、1983年)503頁
- 12 「諸向地面取調書」では「御勘定藤野茂兵衛地面借地住宅」と記されている旨が、小川恭一編著『寛政譜以降 旗本家百科事典』第2巻(東洋書林、1998年)804頁で紹介されている。
- 13 註12小川前掲書にも指摘あり。